

論文 Original Paper

都市の入り口を象徴する神殿 ——ナバテア王国の都ペトラの景観（ヨルダン）

伊藤 哲 夫*

Sacred Palace as the Symbolic Representation of City Entrance ——Landscape of Petra, the Metropolis of Nabatean Kingdom (Jordan)

Tetsuo ITO

Abstract: In discussing about the planning and its background of the Sacred Palace al Khazneh and the Tombs in the historical rockbound City Petra, Jordan we pointed out the following: (A) Al Khazneh is neither treasury nor tomb, it is a temple which symbolizes the entrance of the city, and was planned to be located with careful consideration of its appearance from the rock way, the Siq. (B) And the fact that not all the rock-carved Architecture (Fassade) are tombs as generally insisted, a part of them which are “built” after its integration into romam Province Arabia in the year 106, are temples for solemnizing the city.

Keywords: Petra, rockcarved Temple, Tomb, Hellenism, Barock

要 旨：本論はアラビアの砂漠の民、ナバテア人の王国の都で、紀元前2世紀より紀元4世紀頃まで東方貿易の隊商都市として栄えたペトラの入り口に立つ神殿、都市を囲む高く切り立った断崖の岩壁に彫られた墳墓・神殿群の生成過程、計画の背景について、景観との関連において考察したものである。主なる点として（A）断崖に挟まれたシークといわれる峡谷の道がこの都市への唯一のアプローチだが、シークの終わりの地点に都市の入り口を象徴するものとしての神殿の場を選定したこと、その場合アプローチする者にとっての見え方を考慮して建立の位置を設定したこと、そしてその建設年代の特定について考察した。さらにこの建築と17世紀ローマにおいて成立したバロック建築との関連について考察を加えた。また（B）都市を囲む切り立った岩壁に彫られた建築群（ファサード）をすべて墳墓とする説が従来、支配的だったが、都市景観からみて、ローマ帝国による属州アラビア編入（106年）後の建設のものは墳墓ではなく、都市景観を荘厳する神殿群であると指摘した。

ペトラへはヨルダンの首都アムマンから約250 km, 3時間程の道のりである。紅海のアカバへ抜けるハイウェイは行けども行けども焼けたような赤茶けた砂漠で、時折遠くにセメント工場が見えるくらいで他には何も見えない。だが退屈ではない。それは眼前には何も見えず、目的地への距離感がつかめないからこそ、目指す目的地への期待感が一層大きく胸を膨らませるからであろう。インド等の東方の国々からインド洋岸アラビア半島のムカラ、あるいは紅海を経てエーラトに到着した香辛料や絹、乳香等の交易品は、ラクダの隊商によって砂漠を越え、ペトラを目指して運ばれた。東方貿易の中心地として発達したペトラは豊富で新鮮な水を補給し、一時の休息を与える中継地でもある。そしてここから西に折

れて地中海のガザ等の海港を経るか、更に北上してダマスカスに至りそこから地中海諸都市に交易品が輸送されるわけだが、沢山の物資を数十頭ものラクダの背に積み長い隊列を組んで砂漠を越える隊商が、ペトラへ近づく頃の大いなる期待感はいかばかりであったろう。季節のよっては40-50℃にもなる灼熱の砂漠である。「モーゼの泉」から導いたペトラの美味なる水が喉の乾ききった隊商を待っているからである。

〈険しい峡谷シーク〉

ペトラに近づいた。丘の尾根ずたいに立地する新しいペトラの街はずれからペトラを遠望すると、青空を背景に浸食されて穴だらけになった奇岩が林立する風景が広がる。「岩峰」と言う言葉に相応しいが、林立するさまは雨水に浸食されて鉛筆の先のように切り立ったトルコの Cappadocia のような奇岩とはよほど違う。穏やかとは言えないが、さほど高くはないゴツゴツとした穴だら

* 工学部建築デザイン工学科 教授
Department of Architecture, Faculty of Engineering
Professor

けの岩山が眼前に立ちのぼるように連なる。いずれにしてもどちらも「奇景」と言ってもいいだろう。古都ペトラはこの奇なる様相を呈する岩山の背後に位置するのだが、この都市へのアプローチは断崖に挟まれた険しい峡谷を行くほかはない。この険しい峡谷は「シーク」といわれるが、入り口付近に至る岩の様相は石灰を空から流したかのように白っぽく、乾いた感じで、トルコの Cappadocia や南イタリアのマテラなどのいわゆる岩窟建築群遺跡と変わりがないように思われる。だが一度シーク

の中に足を踏み入れると、岩の様相が一変する。

両側は高さ100 m 以上あると思われる断崖絶壁で、巾は5-10 m 程にすぎない。ところどころに淀みの空間はあるが、切り立った断崖に挟まれていることに変わりはなく、日中、陽が射すことがないような薄暗い場所もある。眼を上に向けると岩肌はこげ茶を基調に赤みを帯びた横縞が層を成しており、その間に何故か黒い層が2-3 筋走り、それが赤みを一層際立たせる、そして上の方は一段と赤みを帯びていることに気付く。19世



図1 奇岩が林立する景観。その向うにペトラの都市がある。



図4 3000人の観客を収容する野外円形劇場。

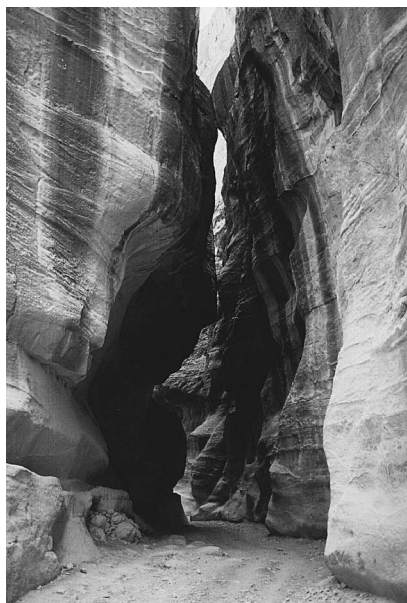


図2 険しい峡谷の道、シーク。

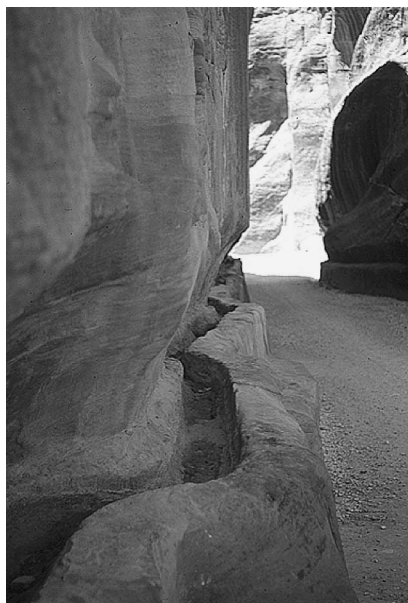
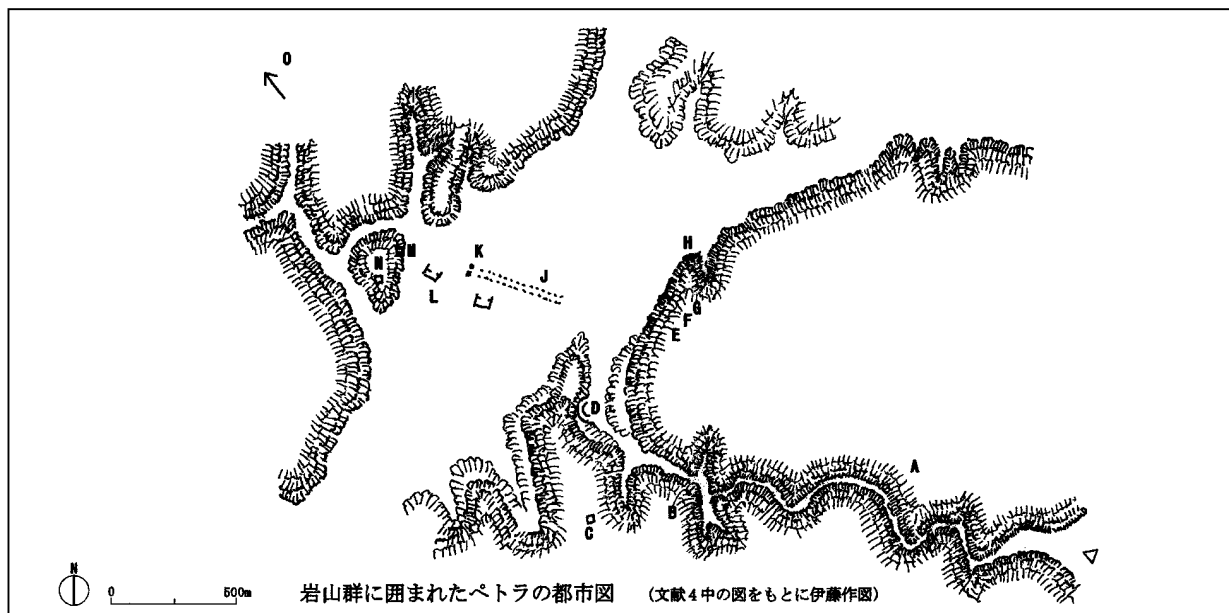


図3 シーク沿いにある岩を削り抜いた導水路。



紀のイギリスの詩人バーゴンがこのペトラを「バラ色の都市」と詠ったと言うが、バラ色とは少し違う。何色とははっきり形容しがたい色だが、「大辞泉」なる辞書にでている深緋、インド赤、あるいはベンガラ色等の色が近いような気がする。そして両側の断崖に切り取られた見上げた青空の形がいい。空と岩の形と色彩とが交響する。ところどころに空を切り取る巨大な岩が頭上に張り出しており、いまにも落下してきそうで身がすくむ気がする。このような峡谷が2 km 程は続く。圧倒的な景観である。

〈岩をくり抜いた導水路〉

峡谷の人を圧倒するようなスケールの景観に僅かながらも人間的なスケールを与え、自然自体の営みに加えて人間の営為、そこにおける人間存在のありように思いをはさせるもの——この景観に美しさだけでなく、意味深さを加えているものが峡谷の片側に走る導水路である。

岩の側面を削り取り、巾30 cm、深さ20 cm 程の切断面が半円状の水路を延々と2 km にわたり峡谷沿いに作ったペトラの都市に上水を導くものだ。巨大な岩をくり抜いたもの、あるいは当時すでにオリエントにおいて高度に発達した築造技術を駆使した石造の貯水槽がペトラの都市内と周辺に数十箇所発見されているが、短い雨期に流れる川の水や雨水、それに岩に浸透した水等を貯水した石の貯水槽や今日の住民が住む「新ペトラ」の街にあっていまでも豊富に湧き出ている「アイン・ムーサ（モーゼの泉）」等から導く水路である。ラクダの隊商の中継地として繁栄したペトラを支え、繁栄に導いた貴重な水を都市内に導く水路だ。

この半円状の導水路だが、峡谷の道を行く人にとっては、それは切断面の切り口のかたちとして見える。その形態が美しい。岩を削り取って導水路を作ったため、岩は頭上に張り出し、道行く人に迫る。その部分が鋭いエッジを描く明快な幾何学形態となり、自然の岩の複雑多様なかたちと対照的な構成をなす。そこには明快な形態を作り出した人間の手の痕跡が明瞭に読みとれる；ツルハシとノミでもって岩を削り取ったのだろう。途方もない人間の数と労働を背後に潜在させつつ、無数のノミの痕跡がこの水路のテクスチュアをかたち作っている。それはリズムカルで美しい。切り立った峡谷の間を射し込んでくる弱い陽の光が、この明快な形態をした導水路に陰影を与え、無数のリズムカルな、全体として美しい壁を形成するノミの痕跡を映し出す。

何億年もの気の遠くなるような年月にわたる自然の営為として現前する美しい色彩と横縞の文様を描く巨大な岩の峡谷に、人の手によるこれも美しい形態の導水路から構成されるペトラの都市へ至る峡谷の道の景観は、人を圧倒し、そして昔の人々の英知を語りかける。シーンとした静寂の中、この峡谷の道シークを歩む自分の足音がコツコツとこだまし、天空に消えて行く。悠久なる自

然の中で、瞬時の生を受けた自己の存在に思いをやる——神々との出会いを予感させるような厳粛な気分になる。岩に内在する何かを感じとるからであろうか——偉大なる景観である。

〈都市の入口に立つ神殿〉

ペトラの都市へと至る道のりは歩いてゆうに20-30分はかかる。途中、都市門としてこの峡谷にアーチがかかっていた跡があったり（19世紀に崩壊してしまったという）、岩壁に様々な彫像や小さな祭壇が彫られたりして、神殿に参詣する人々を導く参道の趣を有するシークだが、この峡谷はペトラという都市にとって防衛上大きな意味を有した。敵が攻めてきたとしても、道幅の狭さから敵の隊列は限られ、岩の上から石でも落とせば敵はひとたまりもないからである。

このシーク（A）が2-3 m と最も道幅が狭まった場所において、アル・ハズネの神殿（B）が岩壁のスリットの間に垣間見える。期待感に促され歩を進めると、視界がいきなり拓け、赤い岩壁に彫られた、アテナイのパルテノン神殿にも匹敵し得るような完璧な形態をした神殿が眼前に現れる。息をのむような劇的な小広場の景観が拓ける。都市の入口としてこれほどの景観を有する都市が他にあるだろうか。

長いシークの道のりを進み、こんな岩山の奥にペトラの都市が果たしてあるのだろうかと一瞬、不安がよぎるその地点の淀みのような小広場を選定し、期待と一抹の不安を抱いて来る者の正面方向にファサードが向くように、巨大な岩山をくり抜いて神殿を計画した建築家の思考は緻密だ。この淀みのような小広場に至る直前のシークの巾は最も狭まる。狭まるから不安は大きくなる。が、その瞬間、その岩壁のスリットの間に神殿が垣間見える（図5）。この場合の神殿の見え方が良い。シークのスリットから垣間見える神殿はその真正面部分ではなく、中心軸をやや右にずれた部分である。つまり神殿の全体像は把握し得ない。が、列柱と上部のトロス（円形の建築）の僅かの部分が見え、もう少しのところで全体像が把握し得る（図6）。それを把握しようと期待感に促されて歩を進める。視界がいきなり拓け、左斜め前方にある神殿の全体像に視点が向く。息をのむ瞬間である（図7）。この場合、神殿は斜め前方にあることから、視線は見回し風になる。岩壁全体の中心に位置する神殿を把握しつつ見ることとなる。青空のもと100 m もの高さの巨大な、美しい色彩を見せる断崖絶壁という自然の景観と、人の手によるこれも美しい神殿とが交響するさまに、人は感嘆する。——これがこれを計画した建築家が意図したものではあるまいか。峡谷のスリットから見る神殿が中心軸の真正面であれば、その全体像は容易に予測され、期待感は薄れる。それに神殿のみに視線が集中してしまい、岩壁との関連、すなわち雄渾なる自然景観との関連における見方が曖昧になってしまう。

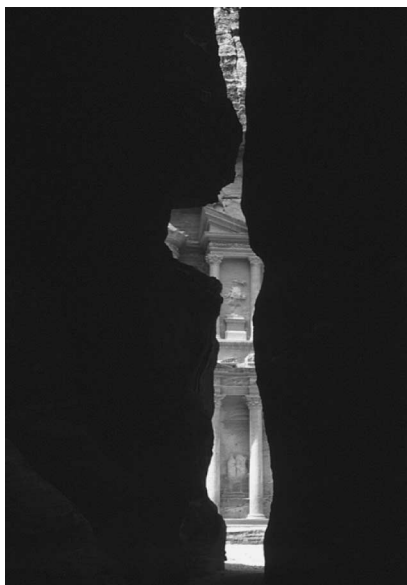


図 5

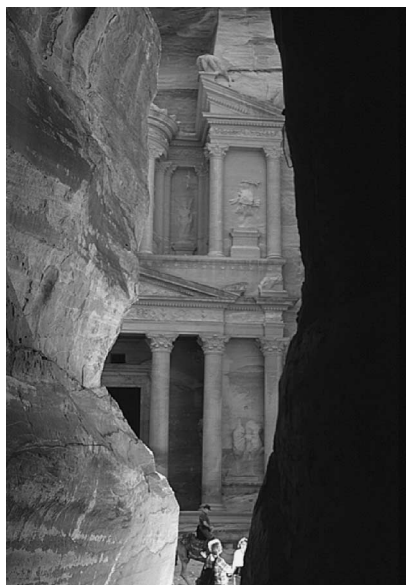


図 6

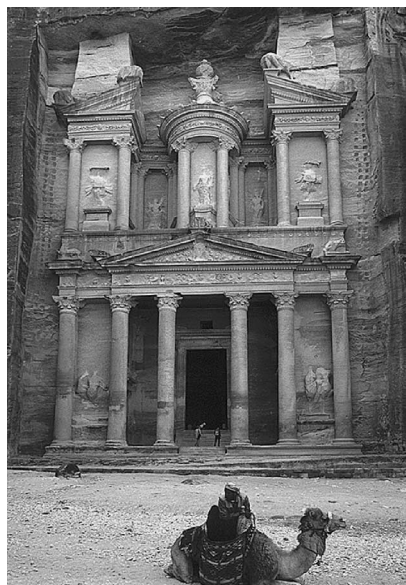


図 7

神殿の巾は25 m、高さ39.4 mである。これが削り彫り込まれた岩壁の高さは、目測で神殿の高さの2.5倍程だから、100 m程の高さであろうか。この高さの岩壁が小広場を囲んでいるのだから圧倒的な迫力でもって身に迫ってくる。岩ずたいに眼を上に向けると、抜けるような青空が見えるが、その青空の視界は狭い。美しい砂岩の岩肌の色彩については既に述べた。だが無論、この色彩も光の状況に応じて時時刻々変化する。神殿は東の方角に向いていることから、午前中、神殿はそしてそれが削り彫られた巨大な岩壁全体が朝日を浴びて、ローズ色というよりレモン色に輝く。朝の光が充満する中、輝く列柱は神殿の床に深い陰影を落とし、岩壁中に一層鮮明に神殿の形姿が浮かび上がる。プロポーシオンも絶妙で、品格を漂わせる神殿である。この神殿の見せ方と建築の質の高さがペトラの景観を名高いものとしている。

これまで神殿とってきたが、ペトラの都市の入口を象徴するこの建築の目的についてはわかっていない。墓所とする説もある。アル・ハズネと名付けられており、「(ファラオの) 宝物庫」を意味するというが、これは便宜上の命名だ。この命名を信じて神殿中央上部トロスの頂部の丸い壺の中に金銀財宝が隠されていると思ったベドウィンの者が銃を撃って中身を確認めようとしたという。その銃痕は今日でも眼に見える。それにしても都市の入口に大切な宝物を保管することなど考えられない、との指摘があるが(注1) 同感である。都市を守護する神を祀る神殿ではあるまいか。

〈岩山に庇護された都市〉

この美しい象徴的な都市の入口広場を後にして、更に岩壁に彫られた墳墓群が立ち並ぶ峡谷を抜けると、ペトラの都市景観が拓ける。周囲を高い切り立った岩の断崖

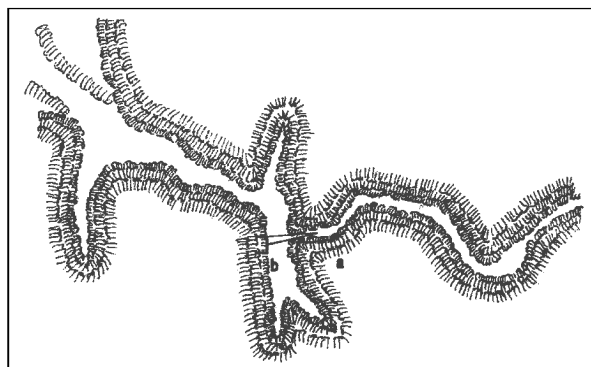


図 8 神殿入り口。堂々たる



図 9 神殿の内部空間。岩肌の色彩、横縞の文様が美しい。

に囲まれた盆地に形成された都市、「自分たちの世界」だ。断崖の高さからすると壮大なスケールだが、何故か岩山に包まれるような庇護感がある。遠眼には厳しく切

り立った断崖だが、近づくと岩肌は柔和で、あでやかとでもいい深緋あるいはベンガラ色の色彩を呈しているためだろうか。古代ヘブライ人にとって神を象徴していたのは岩だと言うが、当時のナバテア人にとってもそうであったのであろう。——周囲を神々が宿る岩山に抱かれる都市がペトラであり、ペトラとはギリシャ語で岩、つまり岩の都市、神々の都市であったのである。

美しい色彩と横縞の文様を描く岩の断崖の底に位置するナバテア王国の首都ペトラだが、この岩山地帯一帯は数億年前の昔は海底であったと聞くと不思議な気がする。あの「世界の屋根」たるヒマラヤも海底であったという。ヒマラヤの麓の子供達は学校が終けた放課後、近くの川原に出かけてアンモナイトの化石が付いた石ころを探し、これを売って家の生計の足しにするという。海底であった証拠である。ペトラの都市もこれと同じように大昔は海底で、石英を中心とする砂粒が堆積し、数億年をかけて砂岩なる岩石となった。そして数億年前の造山運動によって隆起し、風化と浸食作用によって、今日見る、否、昔ナバテア人が見た岩の景観となったという。気が遠くなるような悠久なる自然の営みの結晶である——それが偶然にも美しい。厳密に言えば、それが偶然であるかはわからない。20世紀初頭のウィーンの建築家ヨーゼフ・フランクは「偶然性」なる概念を建築美の手法のひとつに加えたが（注2）、フランクは人間の作意に限界を感じたからであろう。その根底には自然の営為による美の驚異に謙虚に眼を向け、そして耳を傾ける研ぎ澄まされた感性があるからに相違ない。

前述のペトラの都市景観が突如として拓ける場所は二方を岩の断崖に囲まれた都市広場で、左手には切り立った岩に抱かれるように野外の円形劇場（D）がある。紀元前1世紀頃、ナバテア王国の時代に建設されたものを、ローマ人によって拡張されたものだ。岩を削り取って客席をつくった3000人もの観衆を収容する堂々たる劇場で、広場の一部を構成する。ナバテア王国は紀元106年トラリアヌス帝によって帝国の属州アラビアとして併合されてからは、ペトラはナバテア人の都市とローマ人の都市という2つの相貌を帯びることとなる。右手は岩の断崖が連なり、岩を切り取るように刻まれた墳墓群・神殿群が立ち並び、壮大な景観を呈している。それらは後世の研究者が命名したのであろう「（俗称）骨壺の墓」（E）、「（俗称）コリントの墓」（F）、「（俗称）宮殿の墓」（G）、「（俗称）セクティウス・フロレンティヌスの墓」（H）などと王侯・貴族を祀った神殿群が堂々たるファサードを競うように並び立っている（注3）。シリア、メソポタミア、エジプトそれにヘレニズムやローマなどの様式が折衷したファサードで、だから単調な形式美に陥ることない、魅力的な興味深いファサードとなっている。そうしたファサードによって荘厳された美しい都市だ。

そのなかのひとつに「（俗称）絹の墓」と命名された神殿がある。巨大な岩の塊を垂直に削り取り、イオニア様式であろう柱頭を有する付け柱とそれに支えられたコーニスと庇、その上に段状の妻壁を擁するものだが、今日では風化が激しく形態も定かではない部分もある。



図10 従来、墳墓とされるファサード群の一つ。上部の段状の妻壁はシリア、メソポタミアの様式。全体としてプロポーションが良く、美しい。

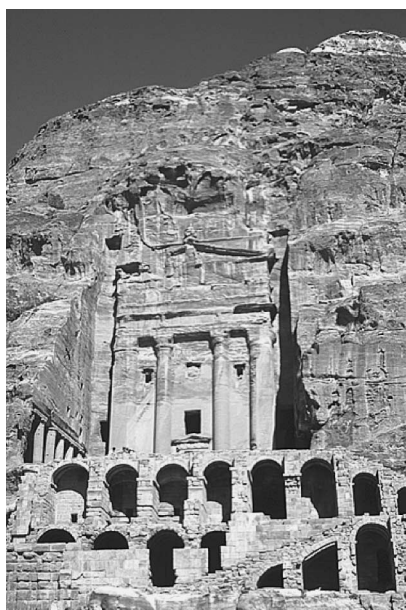


図11 （俗称）骨壺の神殿。列柱廊に囲まれた前庭とそれを支えるアーチの構造。

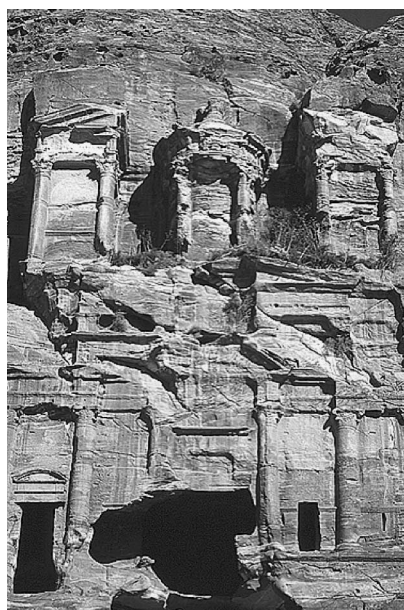


図12 （俗称）コリント様式の柱頭がある神殿。破壊と風化が激しい。上層はアル・ハズネの神殿のそれと酷似。

他の神殿もそうだが、プロポーションの確かさをはじめ、形態は端正で格調高い。そして茶から赤、ローズ、ピンク、白と微妙な色彩のグラデーションをみせる横縞の文様の「絹のような」岩肌の美しさと形態が、美しい建築を現出させている。

岩の断崖だけでも雄大だが、それに刻まれた建物群の形態が良く、岩肌の色彩と文様とがその形態を引き立て、いわば自然の美を引き出した質の高い建築とが交響している。自然の景観が人を促し、潜在する力を引き出させるとは度々言われることだが、それには自然に潜在する力に耳を傾ける繊細な感覚と、それを引き出し美しく作り上げる理知的な能力を有していなければなるまい。ナバテア人はこうした点において、よほど秀でた民族であったに相違ない。

〈膨大な労力を要する岩を切り削る作業〉

それにしても巨大な岩塊を垂直に切り削る作業は途方もない労力であったに違いない。切り削られた岩塊の切り口側面はもとの岩塊の形をとどめるから三角形となり、中世ゴシック教会のフライング・バットレスに似てこの教会を支えているかのようだが、そこには例のリズミカルなツルハシとノミの痕跡が鮮やかに見える。岩の美しいテクスチュアだ。膨大な労力を要する岩を切り削る作業はファサードだけではない。開口の奥にはあまり大きくはないが空間がくり抜かれている。その作業手順は他の未完のまま放置された岩窟を見るとわかる：正面ファサード（もっともこのファサードしか存在しないのだが）が大枠において一応完成すると、それまで用いていた足場を利用して、あらかじめ考えていた室内の空間の天井の高さに開口をつくり、それを利用して順次掘り（削り）下げていく。こうすれば室内空間をくり抜く上で、足場は必要ないし、また床は最後に完成するために傷がないきれいな床仕上げが可能となる。アテナイ・アクロポリスのパルテノン神殿の建設工事の手順において、床仕上げについては、工事中に床に傷がつくことをあらかじめ想定して、10 cm ほど余分に厚い石を使用して床レベルを高くしておき、すべての工事が完成した時点でその分、床を削ってきれいな床仕上げをしたというのが、完成時の床仕上げへの配慮は共通している。

こうしてくり抜かれた室内空間はいわゆる洞窟のような自然の丸みを帯びた空間ではなく、床壁天井の4面が直交したしっかりとした直方体の建築空間である。堂々たる付け柱などを持ったものもあるが、多くは何の飾りもない簡素な空間で、ファサードと同様に室内を構成する壁と天井は鮮やかな岩肌の色彩と縞の文様に彩られ、美しい空間だ。例の工事に使った小さな開口をとうして外から射し込む僅かな光によって、そうした色彩と文様の微妙な変化が、そしてリズミカルなツルハシとノミの痕跡が微妙な陰影となって映し出される。神たる岩にくり抜かれた空間に相応しい。

岩窟教会群の内部空間が岩肌自体に美しさがいないためであろうか、壁や天井に彩色が施され、フレスコ画が描かれているトルコの Cappadocia やブルガリアのイバーノボのものが知られているが、ペトラの魅力は美しい砂岩の肌の色彩と文様にある。自然の美を引き出した点にある（注4）。

さて野外の円形劇場を見ながら都市広場をとうり過ぎ左手に折れると、列柱が立ち並ぶ（今日では数本の、それも修復された柱しか立っていないが）堂々たる街路が東西方向に一直線に走っている。街路の敷石には轍の跡が認められ、車の往来が激しかったことがうかがわれる。街路に面して神殿や市場の建物、それに商家などが立ち並んでいたであろう。古代ローマ都市に典型的な列柱が立つ堂々たる街路空間デクマヌス・マクスムス（J）（注5）である。この街路は神域テメノスの門（K）に通じ、神域にはナバテア人の信仰する神を祭る神殿（L）がローマ建築によって立っていた。背後の緩やかな斜面にはレンガ造の住居跡が認められる。これらの遺構は未だ充分に発掘されていないが、往時の繁栄が伺われる。106年属州アラビアに組み込まれてからは、ナバテア人とローマ人という2つの民族がこの都市の住民となる。ローマ人はレンガを積んだ組石造の住居に住み、ナバテア人は従来どおり神殿のように岩をくり抜いて穴居していたのであろう。盛時には2万人もの人々がこの都市に住んでいたとされるが、いったいどんな生活を送っていたのであろう。

〈墳墓か神殿か〉

ところで神殿とされる建築群はいったいどのような目的であったのか。僕は神殿と言ってきたが、それらは墳墓・洞窟墓あるいはアル・ハズネのように宝物庫ともいわれている。わが国の中世鎌倉において「矢倉」といわれた洞窟が墓であったし、また古代ペルシャ帝国の皇帝の墓がこのように岩壁に彫られた洞窟墓で（注6）、ペトラのそれに酷似していることから、墳墓説が有力らしい。ペトラの都市に関する資料を読むと、殆ど「……らしい」という推測だ。発掘調査は未だ終わっておら



図13 列柱街路を東の方向、岩壁に彫られた神殿群を見る。

ず、またこうした規模の都市には当然存在したであろう記録文書保管所が未だ発見されていない。従ってアテナイ・アクロポリスのパルテノン神殿の造営についての記録文書が未発見のように、ペトラについても記録文書が未発見のため、よくわからないことが多いというのが本当のようだ。この地の近くのクムランの洞窟において、1947年に羊飼いの少年によって「死海写本」が偶然発見されたという「世紀の発見」があるが、ペトラの都市に関する記録文書もこれと同じようにいつの日にか発見されるのではあるまいか。

僕は墓としての一面を有することは否定しない。近年の発掘調査はそのことを一部解明し、また同じナバテア王国の紅海に近いヘグラという都市にもこれと酷似したものがあり、墳墓であるという。だが少なくとも大規模な「(俗称) 骨壺の墓」, 「(俗称) コリントの墓」あるいは「(俗称) 宮殿の墓」等はこうした面は余程薄れ、ペルシャから伝わった墳墓が転化し、神となった死者を祀る神殿であると考えたい。ローマ帝国の属州の都市になってから、この傾向は強まる。

ローマ人によって建設された列柱街路を東の方向に向けて歩むと、前方軸線上にそして左側の岩壁に彫られた神殿群はローマ風の様式と規模の大きさから見て右側のそれと明らかに相違する。右側のもはファサード上部が段状のデザインとなっており、アッシリアの様式だし、規模も小さい。例えば左側の「(俗称) 骨壺の墓」は両側を列柱によって囲まれた前庭を有する堂々たる建築(?) だが、その前庭を支えるアーチ・ヴォールトによる下部構造が今日むき出しの遺構としてあるが、これを見ると明らかにローマの構造技術である。それに古代ローマ人は都市の中に墓を作ることを忌み嫌った(注7)。そうしたことから墳墓でなく、神殿であるまいか。列柱街路正面前方に華麗な神殿群が展開するように、都市を荘厳しようとしたのではあるまいか。

またもし墳墓とするなら、アル・ハズネのように都市の入口に象徴的に墓を配置するとは考えにくいし、「(俗称) 宮殿の墓」の場合のように上部に貯水槽があること、また(とりわけ属州の都市になった後は) 都市の広場の周囲を墓で囲むとはこれまた考え難いからである。神殿であったからこそ、後に東ローマ・ビザンティン帝国にこの都市が組み込まれた時、いくつかの神殿がキリスト教会へと転用されたのではあるまいか(注8)。ペトラは死者の町・ネクロポリスではなかった。神殿群が東方貿易の中心地として繁栄するペトラの都市の景観を荘厳した。

〈岩山への高いヘレニズム文化の刻印〉

ペトラの都市は1812年スイスの探検家 J. L. ブルクハルトによって「発見」された。紀元1世紀末まで北アラビアの遊牧民ベドウィン族であるナバテア人の王国の首都として栄えたペトラは、紀元106年トラリアヌス皇

帝率いるローマ帝国軍によってその属州アラビアの一都市として組み入れられ、ラクダの隊商の交易ルートから徐々に外れることから没落し始める(注9)。その後追い打ちをかけるように4世紀と8世紀に大地震に襲われ都市の大部分は崩壊し、以後「忘れられた都市」となった——土地のベドウィン族にとっては無論、知られた存在であったろうが。ペトラがこんなにも長い間、よそ者にその存在が気付かれなかったのは、唯一のアプローチ道路が峡谷・シークであったことによる。ペトラの存在の噂を聞いて、ベドウィンに変装し馬に乗ってシークを通り抜け、ペトラの都市の入口に立つ神殿アル・ハズネを眼にしたブルクハルトの驚き、そして感嘆はどんなに大きなものであったろうか。

またトラリアヌス帝の後を継いだローマ皇帝ハドリアヌスが広大な帝国の巡回の一環として、そして懸案のユダヤ人問題解決のためエルサレムに向かう折、この都市を視察に訪れた時(紀元130年春。注10)、アル・ハズネの神殿前に立った時の感動は如何ほどのものであったろうか。ギリシャ最良、建築好きで知られ鋭い鑑識眼を持つ皇帝は、完璧と言ってもいいこの建築の質の高さを一目で見抜いたに違いない。その前年にこの地に於いて死んだ属州アラビアの総督セクティウス・フロレンティヌスを祀った神殿は、ペトラの神殿群の中でも唯一その建立年代が特定できるが、この年代とハドリアヌス帝のペトラ視察の年代とを考え合わせると、この神殿の建立はハドリアヌス帝の直接の指図によるものではあるまいか。入口上部にアーチ状の破風を持ったローマ様式とギリシャ様式が折衷された魅力あるファサードの神殿である。

このアル・ハズネの神殿をはじめとする墳墓群が建立

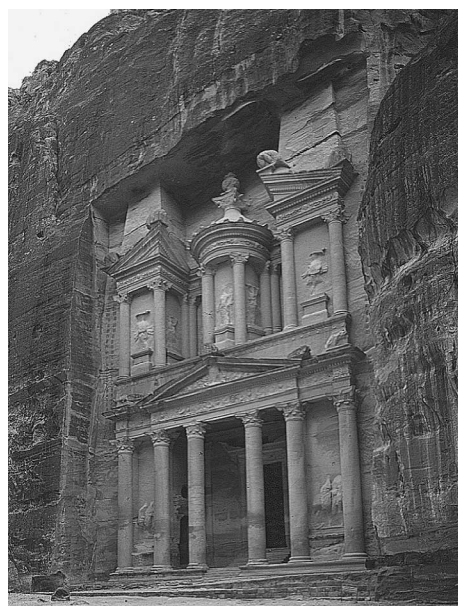


図14 アル・ハズネの神殿。

された当時のヘレニズム後期の文化の中心地は、エジプト・プトレマイオス朝の首都アレキサンドリア、シリア・セレウコス朝の首都アンティオキア、それに小アジアのペルガモンなどであった。これらの都市と比較すれば周縁の地、それも岩山によって隔離されたと言ってもいい都市ペトラに、とりわけアル・ハズネの神殿のような品格を漂わせるヘレニズムの建築がどうして可能であったのか。この3つの都市を結ぶ地中海沿岸一帯の地域はヘレニズムの高い文化を誇り、岩山によって隔離された都市ペトラにも、シークという細い孔を通して浸透したといわねばなるまい。

この建築は文字どおり、岩山への高い文化の刻印である。高さが同一の下層部分と上層部分の2つの部分からなる2層構成である：下層部分は破風屋根を列柱が支え、神殿内奥への入口を象徴する正統なギリシャ神殿のファサードであり、左右のニッチには風化が進んでいるが5mの高さの騎士と馬の彫像が読み取れる。それに対し上層部分は破風が中央で中断し、そこにトロス（円形建築）が立ち、頂部に大きな丸い壺をいさぐ。その左右のニッチには手斧をふりかざしたアマゾンの女勇者の像が、そして中央トロスの柱の間のニッチにはエジプトの女神イシスの彫像がわずかながら読み取れる。

この2つの層の形態自体はそれぞれ完結し、プロポーションもいいが、明確に異なる。異種なるものが共存しているといえるが、2つの層の高さが同じであること、列柱がコリント様式で統一されていることもあってか、全体として破調とも言えるプロポーションの中にも奇妙なバランスがあり、異種なるものが競い合うためか華麗さが前面に出、にも拘らず香気と品格とを漂わせる不思議な魅力を持つファサードとなっている。

様式的にはヘレニズム後期からローマ初期のもので、近世17-18世紀のバロック建築様式を先取りしたものである。ヘレニズムの建築はエジプトや中近東の都市において、その地の土着のそして東方の文化と混淆しつつ、古典ギリシャの建築を脱却したものだ。アレキサンダー大王が活躍した時代以後の時代の文化をヘレニズム文化というが、大王に似てより自由な進取の精神が時代精神であったのだろう。それまでの古典時代の調和の建築には考えられないような自由な、破調を恐れない構成が試みられた。その建築にはヘレニズム文化の世界性が投影している：ときには異種なるものが共存し、そしてファサードはときには湾曲し、波打ち、躍動する。

ペトラの都市の外れにある岩山の上部にエル・ディールといはれる神殿があるが、この神殿もそれだ。上層部分のトロスに呼応するように下層部分は湾曲し、非常に力動的なファサードだ。これも質が高い、興味深い建築だ。湾曲するファサードをもつシリア（今日ではレバノン）のバールベックの神殿は紀元2世紀のローマ建築だとされるが、こうした例が示すように。ギリシャの文



図15, 16 大きな岩山を彫ってつくったエル・ディールの神殿。湾曲し、波うち、躍動するファサード。

化を継承した古代ローマは、そうした建築をためらいもなく受け容れ、更に自由に展開させた。

ところでこのアル・ハズネの建築の目的とともに、建設年代についての論議が尽きない：ナバテア王国時代（とりわけ紀元前1世紀前半頃）とする説、あるいはその後のローマ帝国の属州アラビア編入（紀元後106年）後の2世紀前半、否その後半だとする説、いろいろある。前者の説が従来有力視されていたが、この頃は後者の説も有力となってきた（注11）。ローマの属州編入後に建設された東西主要街路デクマヌスから東方向を見て、左側の岩に彫られた従来墳墓群とされてきたものは、神殿群だと主張したが、そのうちの一つ（俗称）コリント様式の柱頭を持った神殿は二層構成で上部はアル・ハズネと形態において酷似するが、これをもってアル・ハズネも同時代に建設されたものとは無論いえない。アル・ハズネにモチーフをとって後年建設したとも言えるからである。今日までの結論としては、建設年代の特定という明確な目的を持った発掘調査なしには、建設年代の特定は不可能であり、だから建築の様式面のみの手懸りでの特定期に頼らざるを得ないということだ。

これと関連してわかってきたことは、この建築に見られるようなバロック的趣向はしばしば引き合いに出されるシリアのバールベックの神殿の建設が紀元2世紀であることから、この時代になってようやくローマ建築に

現象し始めたであろうとする説が従来有力であったが、実はそうではなく、アレキサンドリアや東方の世界では既にヘレニズム後期に流行しており、ポンペイの壁画（注12）や初期ローマの野外円形劇場の書割建築などが示すように、西方の社会においても広くゆきわたっていた、という点である。これも建設年代の特定を困難なものとしている。

この地帯を属州アラビアとした皇帝トラヤヌスに仕えたダマスカス出身のギリシャ人建築家アポドロスか、あるいはその直接の影響下にある建築家の設計によるものだった主張がされると、僕は130年春、ここを訪れたハドリアヌス帝の直接の指図ではないかといったロマンを掻き立てる夢想もしたい。というのは帝がローマ郊外のティブル（今日のティヴォリ）の地に別荘の建設を自身の指図の下に進めたのが帝位を継いだ翌年の118年からで、10年後の128年には今日見る壮大・壮麗な建築群の大部分は完成していたと考えられ、この別荘の建築群の質の高さからすれば、130年の時点では既に多くの建築設計の経験を積んだハドリアヌス帝による指図（皇帝付の優れたギリシャ人建築家に協力させて）によるものといっても、それほど的外れではないと思うからである。いづれにせよ才能に恵まれ古典ギリシャ建築に精通しつつも自由な創作精神に富んだギリシャ人建築家の手になるものであることは確かだ。

ボッロミーニは近世バロック期にローマで活躍した興味尽きない建築家だが（注13）、日頃から古代ローマの建築遺構の研究に時間を費やしたことで知られている。例えば上述のハドリアヌス帝の別荘の場合のように、新しい発掘の報がもたらされると、遺構現場にさっそく駆けつけ、スケッチに余念がなかったという。ローマに立つこのボッロミーニ設計によるサン・カルロ・アレ・クァートロ・フォンターネ教会の空間構成はハドリアヌスの別荘の「（俗称）ピアッツァ・ドーロ」の空間に刺激



図19 D. ロバーツによるアル・ハズネの神殿のスケッチ。

を受けたものといっているが、ボッロミーニ自身ある著書の中で、「古代ローマの建築には多くを学んでいる。それらをコピーするのではないが、大いに刺激を受けている」と述べている。そしてペトラのアル・ハズネの神殿を見たとき、思い出したのがそのファサードだ。

ファサード中央上部にトロスを有するという共通性からであろう。否、破調の中にも品格を漂わせる形態の類似性というより、自由な創作精神からであろう。ヘレニズムの建築が古典ギリシャ建築を前提としたのに対し、バロックの建築は古典ローマ建築に通ずるつまり調和のとれたプロポーシオンを標榜するルネッサンス建築を前提とした。同様な現象が歴史に於いて繰り返えされたことを考えると興味は尽きない。ともあれ近世バロックの建築家達の熱心な古代ローマ建築遺構の研究が、ヘレニズム後期の、そして古代ローマ初期のバロック現象を近世において蘇生させたひとつの要因と言っている。

ペトラの他の神殿群が総じて風化が激しいのに対し、このアル・ハズネの神殿だけが免れ、美しい形姿を残しているのは何故だろう。風通しの良さがまず指摘されよう。切り立った岩が断崖絶壁のようにになっていることから、「ビル風」に似てここでは強い風がいつも吹き抜けていく。それに無論、後の修復の手が入っている。1812年のブルクハルトによる「ペトラの発見」の後、多くのヨーロッパ人がここを訪れたが、その中の1人デーヴィッド・ロバーツなるスコットランドの画家がこの地を訪れ（1839年）、ペトラのスケッチを数多く描いたが、その中のひとつ、アル・ハズネのスケッチを見ると1階部分の柱の1本が途中で崩れ落ち、他の柱にも損傷が見られる。崩れ落ちた部分の高さ、損傷の高さが一致していることから、大雨によってシークを激流が走り、神殿に被害を与えたと思われる。今日見ると柱は創建当時のままのように見えるから、柱部分は巧みに修復されたと断言できる。（もっとも、崩壊した柱については煉



図17, 18 アル・ハズネの神殿とサン・カルロの教会。

瓦を積んだ痕跡が認められ、そう巧みな修復とはいえない(ねるが)。またロバートのスケッチを見る限り、ファサードの列柱の間を飾る様々な女神像がはっきり見得るのに対し、今日ではその形が定かには見えないほど風化が進みつつある。神殿の列柱をくぐって室内に足を踏み入れる。左右と奥に直方体の室内空間があるだけで、さほど広くはない。が、壁・天井を構成する岩の肌の微妙に変化する色彩、そして横縞の文様の美しさには眼を見はる。美しい空間だ。

注

- 注1: 滝沢 健児「ヨルダン・シリア 遺跡の旅」1991, 創栄出版。
- 注2: ヨーゼフ・フランク (1885-1967), ウィーンの近代建築を切り拓いた建築家の一人。「Akzidentismus (偶然性について)」(J. Spalt 他編「Josef frank 作品集」所収) Loecker Verlag, Wien, 1981.
- 注3: こうした発掘関係者による安易な命名には疑問が残る。後世の人たちに誤ったイメージを抱かせることが多いからである。顕著な例としては、ローマ郊外のハドリアヌス帝の別荘において、水に囲まれた皇帝の瞑想の場を「海の劇場」などと命名したが、劇場とは全く関係なく、誤解を生じさせる。
- 注4: ペトラの墳墓においても、ファサードを含め内部空間において一部スタッコで仕上げを施し、彩色をしたものもあるということが、近年の発掘調査で判明したという。Th. Weber 他著「Petra. Antike Felsstadt zwischen arabischer Tradition und griechischer Norm (アラビアの伝統とギリシャの規範のはざまの中の古代の岩の都市)」Verlag P. von Zabern, Mainz, 1997
- 注5: 古代ローマは都市の創建にあたって、東西(デクマス)・南北(カルド)と二本の直交する主要街路を建設し、これをもって都市を4分割し、都市を組織した(Roma Quadrata: ローマ・クアドラータ, ローマ4分法)。
古代ローマは植民都市の創建にあたっては、これを正確に実行したが、ペトラの場合はナバテア人の都市が既にあったことと、地形的制約等から東西方向の主要街路デクマス・マクシムスのみが建設されたのであろう。
- 注6: 古代ペルシャ帝国の帝王、例えば帝国の基礎を築いたダレイオス1世(治世: 紀元前521-486)の墳墓は、岩壁に彫られた洞窟墓で、鳥葬後のお骨の盗掘を恐れて上部の岩穴中に安置したもので、ファサードのありようもペトラのものと酷似している。
- 注7: 例えばローマ皇帝トラリアヌスの遺骨をローマ市内に立つ「トラリアヌスの記念柱」下部に納骨しようとした際、元老院はじめ一般市民から、ローマの伝統に反すると猛反対に会ったという。ローマ人の墓は市壁外の街道沿いにあった。
- 注8: 例えば古代ローマのパンテオン(紀元121年建設)は汎神殿で、7世紀から18世紀にわたってキリスト教会として使用された。
- 注9: トリアヌス帝によってペトラをそれた(最初は接続していたが)新たな街道 Via nova Traiana が建設された(111年)。パルティア帝国によって陸のシルクロードによる交易が困難となり、インド洋、紅海を通る海のシル

クロード交易路の整備を意図したと思われる。なお属州アラビアの首都はブストラ(現ボストラ)に移された。

- 注10: 在位21年間で11年以上もの多くの歳月を広大なローマ帝国巡回視察の旅に費やしたハドリアヌス帝は、128-134年の間、3度目の東方視察の旅に出た。129年あるいは130年アンティオキアを立ち、パルミラ、ゲラサ、ダマスカス、それに属州アラビアの首都ボストラ(現ブストラ)を、更にペトラを訪れたとされる。ペトラはこの来訪を記念して Hadriane Petra Metropolis と名付けられた。皇帝はこの年の冬、ゲラサで過ごした。楕円形の壮大なフォーラムをもつこの都市にはハドリアヌス帝来訪を記念した凱旋門が今も立っている。

Th. Weber 他, 前掲書。

アエリウス・スバルティアヌス他「ローマ皇帝群像Ⅰ」南川高志訳, 京都大学学術出版会, 2004

S. ペローン「ローマ皇帝ハドリアヌス」暮田 愛訳, 河出書房新社, 2001

M. Boatwright「Hadrian and the Cities of the Roman Empire」Princeton University Press, 1999 他

- 注11: アル・ハズネの建設年代については、ペトラに関する一般案内書(A, B, C), あるいは近年発掘調査を行ったドイツ、スイスの考古学者たちの論文(D)等では、ナバテア王国時代のもの(とりわけギリシャ好きだったとされるアレタス3世の時代, 紀元前84-62年)とし、イギリス、アメリカの研究者たち(E, F), それにイタリアの研究者(G)もローマの属州に組み入れられた後の、ギリシャ建築の影響がいっそう強くなった時代である紀元2世紀初期, あるいはその後期のものとしている。(G)は特にダマスカス出身でトラリアヌス帝に仕えたギリシャ人建築家アプロドロス, あるいはその直接の影響下にあった建築家の手になるものとしている。

A): M. Bertrund 他著「Petra」

Arabesque International Jordan, 1995

B): M. Ulama「All Petra」Feras Printing Press Jordan, 1997

C): I. Roddis「Petra」Arabesque International Jordan

D): Th. Weber 他「Arabischer Barock (アラビアのバロック)」前掲書所収。

E): J. B. Ward-Perkins「Roman Architecture」Milano, 1974

F): W. I. MacDonald「The Architecture of Roman Empire Vol. 1.2」

Yale University Press New Haven, 1965

G): A. La Regina「Apollodoro di Damasco e le origini del barocco」(「Adriano: Architettura e Progetto」所収) Electa Milano, 2000

- 注12: ポンペイのルクレティウス・フロントの家内の壁画。海辺の別荘を描いたもので、半円形に奥まったところに神殿が挿入されたようなファサードを示す。紀元前1世紀あるいは紀元1世紀初期のものか。

- 注13: Francesco Borromini (1599-1667)。S. Carlo alle quattro fontane 教会は1638-1641年に内部が完成し、ファサードは1665年完成。著書とは「Opus Architectonicum」である。1656年にその書は完成したが、死後の1725年に出版されたもので、自身がローマにおいて設計した聖フィリッポ・ネリのおラトリオ会僧院の計画(1637-)についての書である。なお復刻版として Paolo Portoghesi 編「Opus Architectonicum, Opera del Cav, Francesco Borromini」Edizioni dell' Elefante, 1964がある。